

性犯罪調書 汚された女性たち 第二話

スカトロパイプ連結

制作／人工美少女製作所

ふあつときゃつとDX

序章 循環開始！ 無残！ スカトロループ!!

「イヤアアアアアアツ！ もう止めてえ！ これ、外してえっ!!」
パイプが接続された口から響く、くぐもった声。

高坂愛は、危機に瀕こっぴかあひしていた。

パイプが伸びる先は、アナル。

つまり、口と肛門を連結されているのだ。

そして肛門から伸びる、もう一本の細いパイプ。

こちらは尿道用だ。反対側は、尿道に挿し込まれている。

もう何度となく、アナルに排尿した後だった。

「もうダメエエ！ おっ、お腹があっ！」

——ぎゅるっ！ ぎゅるっ！

既に腸内は、尿と糞便が混じり合ったスープになっている。

——キュッ！ キュッ！

肛門をパイプごと、キツく締めつける。

しかし、肛門が決壊するのは時間の問題だ。

——ブッ！ ブヒイッ！

盛大な放屁が漏れた。もう——時間だ。

「イツ、イヤアアアアアッ！ ——アッ！」

——ブッ！ パアアアアアアッ！！

パイプを流れ、口へと迫るおぞましい糞尿スープ。

愛の視界が、褐色の液体を捉えた刹那——

第一章 監禁

——ドサッ！

「んっ！ んんううっ！」

無造作に床に転がされた少女、高坂愛。

その口には猿ぐつわが噛まされ、手足は縛り上げられていた。

(ううっ……こんなことになるなら、もっと早く帰ればよかった……)

——ガチャン！

廃屋の扉が閉められ、外界と断絶される。

「ヒッ！ これだよし……さあて——」

「んっ！ んんうう！」

(イヤア！ こつちに来ないでっ！)

この男こそが、愛を誘拐した張本人だ。

浮浪者のような見た目をしているが、実際のところはわからない。

「ヒッ！ おとなしくしてりゃ、痛いことはしないからよお……」

「ヒッ！」

(うう……本当に……？ おとなしくしてればいいの……?)

——ジャラッ!

(えっ!? なにっ!? 鎖っ!?)

男が鎖のようなものを引きずってくる。

先端には、ベルトが付けられていた。

——スルッ

愛の脚の拘束が解かれた。

(えっ!? なにっ!?)

男は、両手で愛の脚を両手で掴むと、力任せに大きく広げた——

「んんーっ!!」

(イヤアツ!! パンツ見えちゃうっ!?)

嫌がって脚をばたつかせる愛。

「おい……おとなしくしろ」

——キラッ

ドスの利いた声と共に、ナイフが廃屋の鈍い光を反射する。

「ヒッ……!」

(や、やだっ……! 怖いっ!)

——シヨロッ

タイツから透ける、緑のパンティに黄色いシミが広がる……。

(ううっ……ちよっと漏らしちゃったあ……)

「ヒヒッ……そうだ、おとなしくしてりゃあ、大丈夫だからよお……」

——カチャッ、カチャッ!

大股開きのまま、脚を固定される愛。

今し方、お漏らししたパンティが丸見えだ。

「ンンッ!」

(イヤッ! 見ないでっ!)

「おっと、もう漏らしちゃったのかあ……まあいい」

——ジャラッ！

「次はこつちだ——」

——しゅるっ、カチャッ！

男は、後ろ手の拘束も外すと、再度鎖のついたベルトで拘束し直した。

——ギチッ

(うう……動けない……脚も閉じられない……)

「ビッ、ヒビッ！ さあて、お楽しみはこれからだ……」

「ムムッ！ ンッ！ ンン——ッ——!!」

第二章 ストリップショー

「なるほど……浮浪者のような男に監禁された……と」

「はい……」

私、高坂愛は警察署で事情聴取を受けていた。

先日被害にあった、誘拐監禁事件の話だ。

「では、犯人はその男一人だったんですね？」

「はい……私が見たのは、その男だけでした」

事情聴取をしているのは、この事件の担当刑事、真鍋信也まなべしんやさん。

刑事というとおジサンを想像していたが、意外に若く、結構イケメンだった。

「そうですね……高校の帰りに襲われたということですが、その時もその男が？」

「はい……暗くてよく見えませんでした、多分そうです」

——ギシッ

取り調べが始まってから二十分程。

硬い、パイプ椅子にお尻が痛くなった私は、座り直した。



「ふむ……確認は持てない……と」

「では続きを話して頂けますか？」

「は、はい……」

そうして私は、思い出さないう事件を再び語り出した――

*

*

*

*

*

――ガチャン

拘束された私の目の前で、男がパソコンとカメラをセッティングしていく……。

「よし、これでいい……ほら」

「ぶはっ！」

不意に猿ぐつわが解かれ、口が自由になる。

「こ、こんなこと許されないわよ！ けっ、警察に言うからっ！」

意気込んでみたものの、心の中は恐怖でいっぱいだった。

「ハハ……そうかい、そうかい……」

「そんなことより、これを見な」

薄暗い廃屋の中で輝くディスプレイ。

そこには拘束された私の姿が映っていた。

大股開きにされ、パンティが丸見えになった、恥ずかしい姿が……。

「なっ、なによこれっ!? どうなってるのっ!？」

「ハハ……裏サイトのウェブ配信さ……皆見てるぜ」

よく見ると映像の上には文字が流れている。

読みたくもない下劣な言葉……。

「えっ!? う、うそっ!？」

――ジャラッ！ ジャラッ！

急いで脚を閉じようとすもの、鎖が突っ張ってそれ以上閉じられない。

「み、見ないで下さいっ！ 私っ！ ここに監禁されているんです！」

（二つ言えば、誰か助けてくれるかも……）

「へへっ……無駄さ……スキモンばかりの集まりだからなあ……」

（そんな……誰も助けてくれないの……？）

「さて……皆もお待ちかねだ……始めるぞ」

「えっ——!?!」

そう言うと、男はハサミを使って、私の服を切り出した……。

「ちよっ！ ちよっと！ な、何するのっ!?!」

「裸にひん剥くのさ……皆それを望んでるからなあ……」

「は、裸っ!?!」

（パンツ見られるだけでも恥ずかしいのに、全部見られちゃうのっ!?!）

「や、ヤダッ！ ヤダあっ!!」

——ジャラッ！ ジャラッ！

「おい……暴れるな……」

——キラッ

「ヒッ——」

男が再びナイフを取り出し、チラつかせる。

私は大人しくするしかなかった……。

「へへ、そうだ、それでいい……」

——ジャキッ……ジャキッ……

無残に切り取られていく衣服……。

セーター……セーラー服……ついにはブラジャーまで露出させられてしまった……。

「いやああ……」

「ほら……こっちもだ……」

——ジヨキッ……ジヨキッ……

——はらり

「あっ——」

切り裂かれた衣服を一齐に剥ぎ取られ、むき出しにさせられた。グリーンのブラジャーとタイツから透けるお揃いのパンティ。

それが、私が今身に着けている全てだった……。

「へへ……良い格好だ……でも、まだだぞ」

「いやっ！ ま、待ってっ！」

——パチッ

——はらり

ブラジャーのホックが外され、二つの乳房が露わになった。

AAAカップのほとんど膨らみのないバスト、その頂点にピンッと勃起した乳首が立っていた……。

(いやああ……寒さで乳首があ……)

「ビビッ！ もう感じてんのか……？」

「そっ、そんなわけっ！ あっ！」

否定する私を無視して、男がタイツに手をかける——

——ビリッ！ ビリッ！ ビリッ！

拘束されている部分も無理やり引きちぎり、私から剥ぎ取っていく……。

「あ……あ……」

ついにパンティだけの状態にさせられてしまった。

「じゃあこれで終わりだ——」

——ジヨキッ

「あっ！」

——スルッ

私を守っていた最後の砦が剥がれ、全てが晒された。

「ぐすっ……ぐすっ……いやあ……見ないでえ……」

この歳にも関わらず、まだ無毛のツルツルの女性器。

ぺったんこなおっぱいも含め、昔からのコンプレックスだった。

「へへ、随分と華奢な体だな……」

「うう……」
「さてと……邪魔なものはこれでなくなった」
「次の段階だ……ヒヒッ！」
「えっ!? な、なにそれっ!?!」
「イヤア——!」

第三章 パイプ接続

男が取り出したのはパイプが付いた、マスクのような道具。
パイプは長く、メートル以上あるように見える。

「ほら、今着けてやるからな……」

「シムツ——」

——カチャツ……カチャツ……

男が私の顔にマスクを被せ、装着していく……。

「な、なに……これ……」

口から伸びたパイプから、くぐもった声が漏れる。

「ハハっ……そっちは口用だ……それでこっちは……」

——ズブツ!

「ンモオオオオオツ!!」

男はいきなり、口から伸びたパイプの先端を肛門に突き刺した。
お尻に激痛が走る。

「いっ! 痛いっ! 痛いっ!」

「おっと、少し裂けちゃったか……」

「ハハ、ローションでも塗るんだったな」

「いっいっ……」

まだ痛むお尻を気にする間もなく、男が別のパイプを取り出す。

「こんどは先程より、かなり細い。」

「ほら、今度はこっちだ……」

——ツプッ！

「ンッ——！」

尿道にパイプがねじ込まれる。

「ダメッ！ おしっこ出ちゃうー！」

「へへ、漏らしたくなかったら、我慢するんだな……ほら」

——ぬぷっ

「ヒッ——」

パイプの反対側が、既に太いパイプが挿し込まれている肛門の隙間にねじ込まれた。

「あ……あ……これって……」

「ヒヒッ！ どういうことが気づいたようだなあ……」

パイプは尿道からお尻、お尻から口へと接続されている。

つまり……。

(自分のおしっこで浣腸させる、つもりなの……?)

「さて、いつまで我慢できるかな……ヒヒッ！」

「ダメエ……こんなの……狂ってるわよ！」

「なんどでも言う方がいいさ……俺達はそれが見てえんだからなあ！」

(我慢しなくちゃ！ でも、寒くて……)

季節は冬、廃屋の中は冷えていて、体は全裸に剥かれている……。

(こんなんじゃ、いつまでも耐えれないっ……!)

——どすっ

「さて、俺は座って見てるだけだ……へへ」

こうして、裸でおしっこを我慢する時間が始まった——



— 続きは製品版でお楽しみ下さい。